

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.207
2013(平成25)年 1月25日(金)発行

相馬市磯部母の実家 家族6人が津波の犠牲に

いわき市 教員 T.M.さん(40歳)

【(3/10)】前日の地震は大震災の予震だったのか

正午くらいに出張先から職場へ戻る途中の信号待ちで、突然車が揺れた。「今日は、風が強いなあ」程度だったが余りにも不自然な揺れを感じたため、外を見ると電線が大きく揺れ、民家からは人が出てきた。確か震度4と記憶している。今思えば、大震災の予震だったのだろう。

【当日(3/11)】これは映画か、夢か？

下校後、職員室へ戻った時に、突然緊急地震速報が鳴り響くと共に地鳴りを感じた。大きく揺れはじめ、「外に出ましょう」と声をかけ合い、中庭へ避難する。しかし、揺れは治まらずますます大きくなる。窓ガラスが大きく波打つ様子に危険を感じた。「窓から離れて!」とっさに大声で叫んだ。「キャーッ!」女性職員の悲鳴が聞こえる。みんな腰を落とし、立つことができない。地面が揺れる…今にも地割れしそうな揺れである。これは映画か？夢か？現実として受け入れられないくらいであった。空には大量の鳥が西の空へ一斉に飛び立ったかと思うと、次の瞬間に山から大量のオレンジ色の粉(おそらく花粉)が舞い飛んだ。携帯ワンセグやラジオで、大津波警報が発令されていると聞き愕然とする。

母の実家から「全員無事」と連絡が入るが・・・

余震の合間に、家族の顔がよぎる。携帯は妻にはつながらないため、安否確認のメールを送る。同居の父につながり、自宅はかなり揺れたが母も無事とのこと。母の実家(相馬市磯部)とも電話がつながり、周囲は瓦が落ちているが大きな被害はなく、これから津波が来るので避難するとのことであった。しかし、これが母の実家との最後の会話となるとは誰も全く想像しなかった。

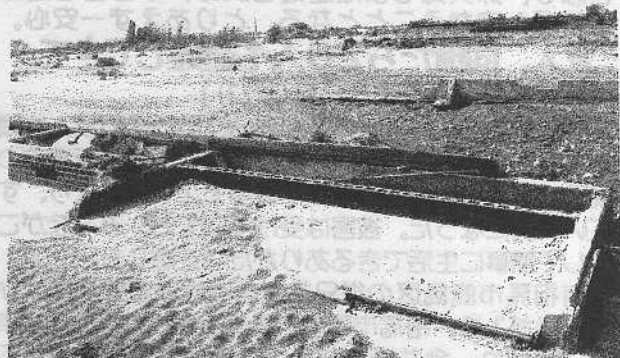
職員室に戻る際、北東のどんより空と地平線の間にオレンジ色のモヤが見えた。四倉方面の津波だったのだ。

妻と子どもたちは自宅近くの福祉センターに避難し、私が帰宅の途についたのは、23時30分過ぎだった。家の中は多少食器類が割れた程度で地震の被害は最小。その夜は余震におびえながら、一人で明かした。

【翌日(3/12)】翌12日、原発が不安になる

余震で何度も目を覚ますが、無事に朝を迎える。家族も避難の福祉センターから帰宅。停電ではなかったが、断水に。ガソリンスタンドに列が出来始め、妻が直感的に並んで給油し、これが後の避難でどれだけ役立ったことか……。昼頃、出勤し、各家庭へ安否確認の電話をする。学校に宿泊した生徒も帰宅し、15時過ぎには非常用タンクの水も底をつきる。自宅も心配なため、16時頃に帰宅。

3.11東日本大震災・・・私の体験 21



▲家族6人が津波の犠牲になった母の実家あと。ただの砂浜になったが、家の土台を手がかりに確認できた。

妻の実家の新潟市に避難することに

夕方、妻の実家の新潟市への避難も頭をよぎったが、夜中に中越地方でも立て続けに地震があったことから、もう少し様子を見ることにする。しかし、その後テレビで福島第一原発に煙が上がる映像とともに、福島第一原子力発電所から半径20km、福島第二原子力発電所から半径10kmが避難の指示が報道される。

そこで、私と妻は新潟避難を決める。妻は涙ながらに父母にも避難を訴えたが、相馬市磯部の母の実兄一家の安否も分からないことや、いわきでコンビニを経営している娘(私の妹)夫婦と子ども達の事も気にかかることから、もう少し様子を見ることになった。とりあえず、私、妻、3人の子どもの5人で新潟へ向かう。

いわき市から8時間かけて新潟に到着

庭から見える国道49号バイパスは、西へ避難する車で大混雑の様子。妻の友人から「風向きをみると郡山方面は避けた方がよい」との情報を受け、いわき・湯本方面から石川町を抜けて南会津を通り新潟入りを試みる。

しかし、須賀川から南会津へ抜けようとしたが、昨日の地震の影響で藤沼湖が決壊していたことで、国道118号も通行止めとなっていた。そこで、裏道を通って磐梯熱海から国道49号へ抜けて新潟市へ向かう。

いわき市の自宅から8時間かかり、着の身着のまま新潟市の妻の実家へ到着する。トイレの水が流れる、温かいお風呂には入れるなどのごく当たり前のことを被害が少ない実家で経験し、改めて普通の生活に感謝する。

【3日目(3/13)】一日中 テレビを注視

夕べは、原発の状況が気になりテレビを消さずに寝た。起きるとすぐにテレビに・・・暇さえあればすぐにテレビの情報に目と耳を傾ける一日だった。子どもたちも、事の重大さを感じているのか、室内でおとなしく過ごしてくれる。妻と義母は、父母と妹夫婦がいつ避難してきてもいいように、部屋の片付けや当面の食料の調達、日用品などの準備を始める。(裏面へ)

14日、第一原発3号機の爆発で

【4日目(3/14)】父母も避難を決心

11時頃テレビで、福島第一原発第3号機で水素爆発が起こり、灰褐色の煙が高くあがって建物の外壁がなくなり骨組になっている様子が流れる。父にすぐに連絡を取ると、父母もさすがに危機感を感じ、妹夫婦もまた避難を決め、車2台を連ねて新潟へ向かうこととなる。とりあえず一安心。

友人、同僚たち20人も避難してきて

【5日目(3/15)～13日目(3/23)】

日を追うごとに避難場所が無い、いわきの友人や職場の同僚などが、私を頼りに避難してくる。新潟市の義母の一人暮らしだった家が最多で20人となり、すごい状況になった。被害は受けていても、みんながこうして無事に生活できるありがたさを感じた。

南相馬市鹿島区の従兄弟(自宅は津波で全壊)から連絡が入り、相馬市磯部の母の実家(実兄宅)は津波に襲われ、今も消息がわからないという。母が不安を募らせる。生きていたいことを信じてほしい…みんなそう思っていた。

20日になり、妹夫婦がコンビニ店を再開するため、子どもたちを新潟に置いて、二人でいわき市へ戻ることとなる。私もまた、仕事が再開されるため、23日にいわき市へ単身で戻る。ここから、家族バラバラの生活が始まってしまった。

相馬市磯部地区は津波で壊滅状態に 母の実家の<両親・妻・長女(中3)・ 次女(小5)・長男(小3)>の6人が犠牲に

3月下旬になってようやく、母の実家の情報が、母の実兄の長男(私の従兄弟)から入ってきた。「相馬市磯部は壊滅的な被害を受け、自宅は全て津波で流され、高台のお墓も倒れてしまった。自分以外の家族6人、両親、妻、長女(中3)、次女(小5)、長男(小3)が、津波で流され亡くなった。両親以外は、遺体もあがり火葬も済んだ。今は毎日、遺体安置所に通って両親を捜している。長女の中学校卒業のお祝いの日だったのに、一瞬にして家族を失い、一人になってしまった。自分はこれからどうしていけばいいのか」と嘆いている悲惨な連絡だった。

誰もが表現のしようもない悲しみに襲われ、従兄弟を励げます言葉も見つからなかった。



▲百世帯以上あった相馬市磯部は何もない原野に。 原発事故で、葬祭場の職員も逃げ出す

また、火葬を待っている時に原発が爆発したため、葬祭場の職員も霊柩車の鍵を残したまま避難してしまっただけで泣く泣く、会館に残された遺族たちで協力して、遺体を霊柩車に乗せ、火葬場へ運び天国へ送り出したとのこと。何ということでしょう。



▲相馬市磯部の、津波に耐えて健気に残った「奇跡の一本松」。岩手県陸前高田市ではありません。

傷みが激しく両親の遺体と気づけずに

鹿島区の従兄弟も避難先から戻り、複数の遺体安置所を回って、両親を捜していた。悲しいことに、両親の遺体の前を何度も通過したが、傷みが激しく自分の親の遺体と気づくことができず、見つけることができなかった。

結局、伯母(私の母の義姉)の遺体は、親類の誰からも見送られることなく荼毘にふされ、後に歯形鑑定で確認された。伯父(私の母の実兄)の遺体はDNA判定で確認が取れ、4月下旬に親類に見送られ火葬にされた。葬儀場は一杯で空きがなく、家族6人の合同葬儀が行われたのは、7月下旬になってからだった。

思い出の地の惨状、近しい人たちの死…

私たち家族も、4月上旬と5月の連休の合同葬儀の際に、相馬市磯部の惨状を目の当たりにした。私自身小さい頃からよく遊びに行き、また私の子どもたちも同じ年頃のはとこがいて、遊びに行くのが楽しみだった母の実家…今でも信じられない、信じたくない。

子どもたちも、近しい者の死をはじめて体験したこともあり、心理的ストレスは隠しきれない。避難先の小学校で受けたカウンセリングでも結果に表れ、心理カウンセラーの方から助言アドバイスを頂いたほどである。

やはり家族、子どもたちが一番です

3・11以来、我が家の子どもたちにも、容赦なく激変が訪れた。小3の長男、小2の長女、小学校入学の二女とも、不安を少しでも軽減しようと、3月下旬に妻の実家の新潟市の小学校への転校を決めた。いじめられることもなく、周囲の支援を受けながら現在も、楽しく学校へ通っている。私は金曜日の退勤後に職場から直接新潟市の家族へ帰省し、日曜日の夜にいわきの自宅へ戻る生活が続いた。慣れない片道230kmの長距離高速運転だが、家族の笑顔を求め毎週帰っていた。

毎日片道100*。の高速道通勤ですが

しかし、いつまでもこのままではいけない。当面は新潟での生活を決め、思い切って自宅を売却することに決めた。いわき市は『震災バブル』と呼ばれるほど市内は賑わい、ビジネスホテル、飲み屋街、遊技場、競輪場等々は、連日の大繁盛と聞く。中通りから比べると線量も低いこともあり、一生永住のつもりで建てた、自分たちで考え抜いたマイホーム、悔しい気持ちで不動産会社のドアをたたいた。

現在は、勤務校も会津地区へ転勤し、片道100kmの高速通勤ではあるが、また家族一緒に生活ができるようになった。あらためて、家族が一つ屋根の下で暮らすことのできるありがたさを実感している。(2012.3 記)